

「森銑三刈谷の会」だより 50(2026/3/21)

発行 2026/3/21 (月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp



唐来参和 作、政よし 画『再会親子銭独楽：3巻』10オ、[蔦屋重三郎]、[寛政5(1793)]. 国立国会図書館デジタルコレクション 保護期間満了

49:2026/2/21(土) 森銑三 (1934年)「黄表紙作家としての唐来三和」～『再会親子銭独楽』(寛政5年、出版つたや)を読もう No.3 (参加11人)

旅する「料足」、「銭緡(ぜにさし)」 神谷 磨利子

今回は『再会親子銭独楽(めぐりあふおやこのぜにごま)』の8丁ウラから13丁オモテまでの6場面を読んだ。三回連続して読んでくると、文字と画との両方に目が行き、銭の使われ方・描かれ方が次第に分かるようになってきた。上の図(10オ)は船の渡し場で親子が一瞬再会する場である。母の四文銭は「貳文」の渡し賃となり、姉の耳白・弟のづく銭は釣り銭として出され、それぞれ別れていく。改めて耳白・づく銭は一銭の価値だと分かる。

料足、要脚の語の通りづく銭は遠くまで旅をする。江の島(8ウ9オ)にいたかと思うと、伊勢の宇治橋(11ウ12オ)にいる。づく銭は「めんどうだとかなんとかにて一番さきへ出ておいつかはれる」(3ウ)とあったことを思い出す。美しい銭なら財布の中に納まっているのが、づく銭は悪貨ゆえに次から次へと人の手に渡っていった。

銭緡のことが所々に出ていたことも面白い。緡に通した銭96文をもって100文として通用させた慣行があり、その不足分のことを「目」といった。この慣用をずる賢く使った話が登場している。耳白は他の1文銭より大きいので、四文銭の替玉として400文の銭緡一本の中に通され、後ろめたさを感じている(6ウ7オ、棟上げの場面)。緡の中に粗悪な贋金を混ぜていた例もある。一本として使う分には見つからなくても、緡から抜いて順に使おうとするとすぐに見つかってしまうから単独では使えない。そこで、次に並んでいた

づく銭が高い橋の上から投げられることになり、閉口している(11ウ12オ宇治橋の場面)。銭として高いところから投げられたのは棟上げの撒き銭となった耳白も同じだ(6ウ7オ)。投げられて「目が出る、目が出る」と言い、「百で四文の目が出る」と続けているから、恐怖で目が飛び出そうになったことと緡の不足分の「目」とを掛けているのだ。

当時の慣行を知っていればもっと面白く読めた場面も多かったらう。

『再会親子銭独楽』は学ぶところが多い

鈴木 哲

唐来三和(1793)『再会親子銭独楽』3の「づくせん[銑銭](10ウ)は銑鉄製である。銑は硬いが脆く、鋼は強くて柔軟である。科学的には前者(pig iron)は炭素含有量2-4.5%、後者(steel)は0.02-2%である。銑より鋼が良いと感ずる人もいるだろう(スーパーマンはMan of Steel)。

九尺二間(10ウ)は「くしゃくにけん」で「日国」に立項があった。間口2.7m、奥行3.6mで、9.7m²、3坪である。樋口一葉(1895)「にごりえ」に「寧(いっそ)九尺二間でも極まった良人といふに添ふて」があるそう。づくせん「千万里をはしる」(11ウ)は、森三郎(1931)「赤穴宗右衛門兄弟」「たましいは日に千里を走る」、上田秋成(1768,76)「菊花の約」「魂よく一日に千里をもゆく」を連想させる。「かれ」(11ウ)は明治期に女性代名詞「彼女」が現れるまでは、女にも用いたそうである(日国)。竹取物語(c.100)に「かれに思しあはずれば、人にもあらず」とある。「かれ」はかぐや姫である。

『再会一』は学ぶところが多い。

予定

51:2026/03/21(土):3階第1会議室:『再会親子銭独楽』を読もう No.4、絵師・北尾政美(きたお・まさよし)

52:2026/04/18(土):2階視聴覚室:『再会親子銭独楽』を読もう No.5、〈関連〉森三郎「めぐりあひ」『赤い鳥』(1934.8)

53:2026/05/16(土):3階第1会議室:『再会親子銭独楽』を読もう No.6、David Dykes
〈関連〉坪内逍遙「十銭銀貨の来歴談」(1900)他 Joseph Addison "The Adventures of a Shilling" (1710)他

54:2026/6/20(土):募集中、お申し出ください。